

民主化後のインドネシアにおけるミスコンテストと美の表象

アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程（5年一貫制） 1年

依田 ひかり

インドネシア

2019年8月6日～2019年10月1日

計画の概要

本研究では、価値観の表象としてのミスコンテストに着目する。特に、主催団体や参加者といった行為主体の価値観が反映される中で、美という抽象的な概念が具現化される側面に焦点を当て、ミスコンテストにおける美の姿の変貌を明らかにする。

昨今インドネシアでは、ミスコンテストへの関心が高まっている。毎年開催される大規模な国内大会、その優勝者の国際大会における順位に注目が集まるのはもちろんのこと、ブタウィ人や華人、イスラーム、トランス・ジェンダーの大会など多様な趣旨のもとで美が競い合われている。また、SNSの流行も追い風となって、同国におけるミスコンテストへの関心の高さは年々増している。

そもそもスハルト体制後期には、ミスコンテストの開催は法的に禁止されていたが、1998年の民主化を経てその開催が自由化され既述の盛り上がりが起きている。しかしながら、美を投影した表現の場として多様化しつつあるミスコンテストや美の姿の変貌に関する研究は極めて少ない。

そこで本渡航では、数ある大会の中でも権威主義体制時代から今日に至るまで存続する唯一の全国レベルのミスコンテスト「プトゥリ・インドネシア」と、地域レベルの大会ながらも1969年からジャカルタで開催され、長い歴史を持つ男女混合のビューティーコンテスト「アバン・ノネ」について調査した。

成果

今回の渡航では、主に聞き取り調査と資料収集を行った。聞き取り調査の内訳は、2019年プトゥリ・インドネシアのファイナリスト5名、アバン・ノネ出場者8名、2015年ミス・インドネシア優勝者、2018年ミス・アース優勝者の計15名である。さらに、国内外のビューティーコンテスト情報を収集し、公開するプラットフォーム「インドネシア・ページェント・ドットコム」の運営者や、有名な優勝者を輩出してきたミスコンテスト出場者のためのトレーニング事務所「ラトゥ・スジャガット」の運営者、そして、ミスコンテスト優勝者のPR活動を企画するTV業界関係者にもインタビューを行った。渡航前の計画では、ミスコンテスト出場経験者たったの4人としか連絡が取れていなかった。したがって、ネットワ

ークを広げることに成功した点が、今回の渡航の第一の成果である。

インタビューでは、出場に至った経緯や大会の選考プロセス、運営方法などについて質問した。ミスコンテストに出場する前後に出場者各々のストーリーが存在し、とても興味深かった。彼ら、彼女たちの証言によると、ミスコンテストは一過性のものではない。出場前には長期にわたる準備を行い、出場してタイトルを獲得した後も、そのネームバリューを活用して社会貢献活動に邁進する者もいる(写真:2015年ミス・インドネシア優勝者マリア・ハルファンティ氏の教育活動に同行(撮影日:2019/09/14))。

報告書では、書面の制限もあるため本調査の全体的な考察として分かったことを下記に二点挙げる。

第一に、ミスコンテストに関わるアクターが、外見の美だけをステージで競っているわけではないという共通認識を持っていることである。フェミニズムの批判を受けたミス・ワールドなどの国際大会で、評価基準における内面の強化が進んできたというグローバルな流れが、



インドネシアの国内大会の在り方やアクターの意識にも影響を与えた結果であると考察できる。

では、彼女たちは外見だけでなく、なにを競い合うのか。インドネシアでは、あらゆる大会で目的を持った美が求められる。何を目的とするかは、帰属集団の指針や価値観によって異なる。例えば、アバン・ノネで求められる美は、ブタウィ文化に精通することである。したがって、外見だけでなく全体的に美の評価基準を見ることは、ミスコンテストの主催団体がどのようなアイデンティティを持っていて、それをどのように社会へ発信しているかを見ることに繋がる。

第二に、ミスコンテスト出場者、優勝者には帰属集団の代表としての役割が課されることである。クイーンの役割に関するインタビューの中で、何度も「大使(Duta:デュタ)」という言葉聞いた。選ばれた優勝者は、大使となって大会の趣旨に沿った様々な広報活動を行う。インターネットが普及し幅広い年齢層でSNSが流行する現在において、クイーンの大使としての役割やその需要は増す一方である。

筆者は、この広報活動のなかでクイーンは観衆の「お手本」となり、価値観の善性を投影する存在になるのではないかと仮定している。リアル、ヴァーチャルな空間を超えて価値観の衝突と共有が繰り返される現代において、どのような人々が何を善いことだと思っているのかを研究することは、多様性に富む社会において共生を考えるための有意義なテーマである。

本渡航で、ミスコンテストではアクターの内面や価値観の善性が写し出されるという美の表象を超え、多元社会における共生を考える議論を提起することができた。しかしながら、

そういった表象が「美人」によって行われているという事実を無視することもできない。美の評価における内面の強化が、むしろ外見の影響力を確固たるものにしていくという逆説的な結果を孕んでいるようにも見えるからである。今後はこの仮説を元に、多元社会で生きる人々の価値観と美の絶対性について研究を進めていきたい。

資料収集では、国立図書館へ行き、1971年の第1回アバン・ノネの優勝者と当時の州知事で都市・文化政策で著名なアリ・サディキンが同時に写っている貴重な写真を入手した。また、1988年のアバン・ノネに出場経験がある方を訪ねて、当時決勝で配られたパンフレットを複写させて頂いた。パンフレットのなかには、まだアバン・ノネに関する法律が制定されていない1980年代後期における同大会への政府の姿勢が事細かに書かれていた。

プトゥリ・インドネシアの資料に関しては、今回2か月という短い滞在期間で時間の都合を先方と合わせることができず、事務所訪問が叶わなかったため具体的なデータを目にすることができなかった。プトゥリ・インドネシアは最も権威付けられた大会であるため、美の姿の変貌を考察する上で欠かせない存在である。担当者と引き続きコンタクトを取ることで、次のチャンスに期待したい。